

篠岡 2 号窯出土瓦の再整理と再検討 —操業実態に対する一考察—

伊藤 佑真

(愛知県陶磁美術館 特別調査研究員/名古屋大学大学院 人文学研究科)

はじめに

篠岡 2 号窯は、愛知県小牧市上末(丹羽郡)に所在した古代の窯跡で、尾北窯の篠岡地区に属する。1966 年の愛知県教育委員会による発掘調査で、窯体の検出こそないものの、灰原から多量の須恵器・瓦・土管などが確認されており(大参・山田 1967)、その性質から 7 世紀第 3 四半期の操業が考えられ、尾張最古の瓦陶兼業窯として知られている(城ヶ谷 1996)。本稿では、篠岡 2 号窯出土遺物の中でも瓦に着目し、その概要を再整理するとともに、篠岡 2 号窯の操業実態について瓦生産の観点から考察を行なう。

1. 研究史と従来の観察所見

篠岡 2 号窯の出土瓦については、斉藤氏・城ヶ谷氏・梶山氏の検討があるが(梶山 2001・2005、斉藤 1990、城ヶ谷 1996)、特に瓦の基礎整理を行った斉藤氏と梶山氏の検討は注目される。

まず斉藤氏は、篠岡 2 号窯の出土遺物について網羅的に整理・報告をしており、瓦では、軒平瓦の確認はないとした上で、焼成は甘く赤褐色を呈するもの、須恵器と同様に灰色を呈するもの、淡黄褐色で一部に自然釉が掛かるものなどが見られるなど多岐にわたることを示し、さらに、軒丸瓦・平瓦・丸瓦における製作技法への言及を行なっている(斉藤 1990)。以下に示すと、

軒丸瓦は、接合に際し、丸瓦端部凸面を削り傾斜を作り出し、瓦当の中ほどまで埋め込み、凹凸面に粘土を充填して補強していることを、瓦当裏面・側面はナデ調整が施されていることを示し、合わせて一部範傷の位置も示した。

丸瓦は全て無段式(行基葺)の粘土板作りであるとし、凹面は密度が 10×10 本/cm 前後の布目痕と糸切り痕を残し、端面・側面に沿って僅かにへら削り調整が施されているものが多いことを、凸面はナデ調整が施されていることを、側面・端面はへら削り調整が施されているが、狭端面は広端面に比べて調整が粗雑なものが多いことを示し、また、一点のみ広端面を正位として、凸面へ「六」と読めるへら書き文字があることを指摘した。

平瓦は、凹面は丸瓦同様、密度が 10×10 本/cm 前後の布目痕と糸切り痕を残し、端面・側面に沿って僅かにへら削り調整が施されているものが多いことを、凸面はナデ調整を施しているが、一点のみ比較的幅広の格子叩きが認められることを、側面・端面はへら削り調整が施されているが、狭端面は広端面に比べて調整が粗雑なものが多く、さらに側面には分割の際の破断面が凸面側に一部そのまま残されていることを示し、粘土板による四枚作りで

あることを指摘した。

次に梶山氏はさらに詳細な観察所見を提示しており(梶山 2001・2005)、以下に斉藤氏と重複しない限りで示すと、

軒丸瓦は、接合丸瓦について、端面や凸面には刻み目を入れないこと、補足粘土付加の後、瓦当上部から丸瓦にかけて側面平行のナデ調整で仕上げていることを示し、瓦当部における瓦範への粘土の充填については、①外縁部分→②内区部分→③全体に粘土を一枚貼り合わせる、といった順序で行なわれているとした。また、瓦範の形状について、瓦当側面のナデ調整により明確には観察されないとしつつも、外縁部の粘土の充填状況や剥離状態から、瓦範は側面に及んでいたことを、さらに、同範資料(東畑廃寺・奥山廃寺)との比較で、瓦当と丸瓦の接合位置が 90° 回転したものが確認されることから、瓦範は方形であることを、製作技法(接合丸瓦の先端加工方法)が類似することから、畿内より瓦工人の移動があった可能性を指摘した。

丸瓦は、一木模骨による成形で、凹面狭端近くに模骨端部の痕跡があることを示した。

平瓦は、粘土板桶巻き作りによる成形であるとし、また、斉藤氏の指摘にもある格子叩きが認められる個体に着目し、平瓦・丸瓦共に凸面のヨコナデ調整前に格子叩きを施していたと想定した。

以上、篠岡 2 号窯の出土瓦について、先学の整理・検討内容について見てきたが、観察所見については大方網羅されていると言えよう。以下では、先の内容を受けて、平瓦・丸瓦については型式設定を行なうと共に、軒丸瓦・平瓦についてはさらに細かな観察所見を加え(2章)、それらを元に篠岡 2 号窯の瓦生産について瓦工人と供給先の様相を加味しながら(3・4章)、筆者の考察を示すこととする(5章)。

2. 篠岡 2 号窯出土瓦の概要

2.1 軒丸瓦(図 1)

先述の通り、篠岡 2 号窯においては素文縁単弁八弁蓮華文軒丸瓦(坂田寺式)が確認されており、大和の奥山廃寺Ⅶ型式と同範で、かつ範傷の様相から奥山廃寺→篠岡 2 号窯への範移動が明らかとなっている(奈文研 1987)。改めて篠岡 2 号窯の軒丸瓦で見られる範傷の位置を示すと、図 8 のようになる。胎土は小石をほとんど含まないかなり精緻かつ密なシルトである。

製作技法については、先学の観察所見を再度確認し、また、瓦範への粘土補充については、第一に外縁へ紐状の粘土、さらには中房へ粘土を補充した後に、瓦範全体へ粘土を補充している様相が確認できる。丸瓦接合の際に付加する補足粘土はやや多めであるが、少なめの個体も確認される(図 1-3)。総数としては、軒丸瓦が 8 点、接合丸瓦が 6 点確認され、さらに採集品で軒丸瓦が 2 点確認されている(梶山 1994)。

篠岡 2 号窯の製品は、稲沢市に所在する(中島郡)東畑廃寺に供給されていたことが明らかとなっており(岩野 1977)、郡を越えた需給関係が見出せる。

2.2 平瓦(図3～5)

平瓦については、全て粘土板桶巻作りである。凸面はナデを施すものが大半で(I型式)、丁寧なナデ痕を残すものと(Ia型式)、かなり強いナデ痕を残すもの(Ib型式)がある。また、3点のみ格子叩き痕を残すもの(II型式)も確認された。従来確認されていたII型式については(図3-3)、ナデ痕が一部観察されることから、先のI型式においても格子叩きが施されているとし、総じて篠岡2号窯の平瓦では格子叩きが施されているものと推察されている(梶山2001・2005)。しかしながら、梶山氏がナデとした痕跡は、ナデによる砂流が確認できず、破片資料ではあるものの、平瓦側面付近で指頭大の範囲でやや陥没状に押圧痕として格子叩き目が潰れるように確認されることから、指頭押圧による痕跡であると想定され、いわゆる瓦製作時における凸面調整として施された痕跡とは性質が異なるものであると言える。また、新たに確認された個体でも(図3-1・2)、凸面にナデ消しが行なわれておらず、I型式とは調整方法が大きく異なる。そのため、篠岡2号窯の製品が総じて格子叩きを施していたとは現段階で判断できず、少なくとも、I型式に含むことはできない。ここでは異なる型式として分類する。凹面は、ほとんどの個体で布目痕・糸切り痕・杵板(桶型)痕を明瞭に残しており、ナデ消し等は行なっていない。端面は、観察可能な個体に限るが、Ia型式では角を持つ非常に丁寧なケズリ等によって整えられているのに対し、Ib型式では角が未調整のものも多く、端面がケズリにより調整がなされているものの、凸面調整の強いヨコナデによって押し上げられた粘土がそのままの状態に残されている個体も少なくはない(図5-1・4)。胎土は小石をほとんど含まないかなり精緻かつ密なシルトである。Ia型式が183点、Ib型式が50点確認された。

2.3 丸瓦(図6・7)

丸瓦は、先述の通り、無段式の粘土板一木作りで(I型式)、確認できる全ての個体で、凸面はナデ調整、凹面は布目痕・糸切り痕を明瞭に残しており、一部狭端を残す個体で、模骨の端が確認される。胎土は小石をほとんど含まないかなり精緻かつ密なシルトである。105点確認された。

3. 工人単位の抽出

以上、篠岡2号窯の出土瓦について概観した。これら資料は、(確認されている中で)尾張最古と目される瓦陶兼業窯の製品であることから、今後も重要な指標となるものであろう。以下では、これまでの内容を踏まえ、篠岡2号窯の瓦生産について検討・考察を行っていく。篠岡2号窯の開窯については、瓦生産が行なわれていたことを根拠の一つにし、古代寺院(東畑廃寺)の造営が契機であったとする見解がしばしば示される(梶山2001、斉藤1990、城ヶ谷1996、中嶋1994)。このような見解は、篠岡2号窯の生産開始当初から瓦生産がなされたことを半ば認めることとなる。しかし、窯体構造や灰原の層順が不明な現時点では、篠岡2号窯の操業期間の内、瓦生産がどのような位置付けとなるのかを明確に示すことができないため、先の見解を検証することは困難である。そのような中、尾北窯全体の瓦生産に

視点を移すと、瓦当文様と瓦製作技術が当該地域で定着しないことから、一貫性のない、場当たり的な瓦生産であったことが指摘されている(梶原 2010)。そのため、篠岡 2 号窯における瓦生産の実態を復元するにあたっては、生産地のみの検討に限界があると言え、すなわち、供給先である東畑廢寺の側からも検討を行う必要が出てこよう。だが一方で、地方窯における瓦生産については、操業に関わった工人単位の抽出に主眼を置きつつ検討が進められる研究があるように(梶原 2010)、幾数の工人単位が瓦生産に従事したのかを示すことは、その窯における瓦生産を復元する上で最も重要な検討項目であることは言うまでもない。以上から、篠岡 2 号窯の瓦生産の実態を復元していくにあたって、第 1・2 章で得られた観察所見を元に、瓦生産に従事した工人単位の検討を行うとともに(第 3 章)、篠岡 2 号窯の供給先である東畑廢寺において、篠岡 2 号窯産の瓦がどのような位置付けとなるのか、数量比等を用いて検討し(第 4 章)、生産地と消費地の両面から、篠岡 2 号窯の瓦生産について考察していく(第 5 章)。

3.1. 平瓦 I 型式の属性差と相関

瓦窯の出土瓦に対しては、その一括性の高さから、最小工人単位の抽出や操業時期・実態の検討が行われ、数多くの成果が挙げられている(e. g., 五十川 1981・1982、岡田 2010、梶原 2010、木立 1987、新尺 2021)。そのような検討においては、瓦における製作技術の属性抽出・分類が必要となり、それら属性の中でも、より最小工人単位の抽出に有効となる属性を基軸に議論が展開される。例えば、瓦でも、平瓦・丸瓦の凸面調整における叩き具の違いが看取された場合、それは単なる道具の違いではなく、その背景にある瓦工人の社会的・文化的側面が関係していると想定されることもあり(新尺 2021)、さらに桶・模骨の復元(e. g., 栗田 2005、花谷 1997・2002、谷川 2023)や叩き方・凹凸面調整・側端面調整などのような細部調整(e. g., 五十川 1981、梶原 2010)といった諸要素を組み合わせることにより、詳細な操業実態を復元することができる。そのような中、篠岡 2 号窯の出土瓦では、軒丸瓦・丸瓦に総じて大きな属性差は看取されないものの、平瓦においてははいくらか属性差が看取された(I a・b 型式)。そのため、ここでは篠岡 2 号窯出土瓦でも、平瓦 I 型式について改めて属性の整理を行うと共に、属性差の背景について、可能な限りの考察を加える⁽¹⁾。

まず、第 1・2 章の内容を基に、平瓦 I a・b 型式の各属性について改めてまとめると表 1 のようになる。これらを見ると、基本的には総じて共通する属性を持つが、分類の根拠となった凸面調整と端面調整、厚さに違いが見られる。さらに、凸面調整と厚さに着目し、平瓦 I a・b 型式の出土比率をまとめると(図 9)、やや幅はあるものの、I a 型式は、相対的に薄い個体が多く(厚さ 1.5~2.9cm)、I b 型式は、相対的に厚い個体が多い(厚さ 2.5~3.5cm)ことが分かる。そのため、凸面調整と厚さの属性は相関性がかなり強く、I a 型式と I b 型式における違いは、単なる同一工人単位内で見られる製作の揺れ⁽²⁾によるものではなく、工人単位の違いが反映されている可能性が指摘できる。

3.2. 最小工人単位の抽出

次に、先に指摘した工人単位の違いが反映されている可能性について検証していく。まず、検討を進めるにあたって、最小工人単位とその抽出方法についてまとめておく。最小工人単位とは、「瓦に見られる属性の組み合わせ(複数の属性が共通して排他的であること)によって分類された型式=他との間に人の行き来がない工人のまとまり」と定義されている(梶原2010)。そのような中、最小工人単位の抽出にあたり着目する属性に対しては、谷川氏の枠組みが注目され、平瓦に残る痕跡について、「①造瓦器具によるもの、②工人によるもの、③その他」に区別し、「②の痕跡は、②-1 工人個人のクセ(手法)による痕跡と、②-2 工人集団で伝統的に保持される技術体系(技法)による痕跡に細分できる」とし、「②-1は、工人単位の識別に強く関わる属性」、「②-2 は、工人集団のまとまりを把握する上で重要な痕跡」としている(谷川2025 9頁)。だが、篠岡2号窯の資料は残存状況が悪く、破片個体ばかりのため、製作痕のみからの検討はやや困難を要する。そこで本稿では、瓦の形状差とそこに関わる瓦工人の身体技法・認知程度を念頭に、篠岡2号窯における最小工人単位の抽出を行なう。

改めてIa型式とIb型式の間に見られる属性差を示すと、凸面調整と端面調整、そして厚さに違いが見られる。これら属性差の背景については、凸面調整や端面調整は、製作工程における身体動作の違い(e.g., ナデの方向や強弱)や、製作工程の有無(e.g., 丁寧なナデの有無)、厚さは、粘土板の切り出しに際する違いや、桶への巻き付けの方法の違い、焼成時の縮小率の違いなどといった要因が考えられる。そのような中、そもそも瓦は規格品であることから、その製作に際しては、ある程度、瓦というものの形状や使用目的といった、いわば基本事項の共有が工人にもなされていたはずで、それらを工人が認知した上で瓦の製作が行なわれる。このような視点で見ると、Ia・b型式間における凸面調整の違い(丁寧なナデもしくは強い横ナデ)は、瓦の形状や使用目的には直接的な影響を与えない属性であることから、瓦製作上の技法差として捉えられても、工人の瓦に対する認知差としては捉えにくい属性であると言える。しかし、Ia・b型式間の厚さや端面調整(特に端面角の調整の有無)の違いについては、瓦の形状に関わる属性であることから、瓦製作上の技法差とまでは捉えられないにしても、工人の瓦に対する認知差として捉えられる属性であると考えられよう。このように少なくとも、瓦という規格品を製作する際に、厚さならまだしも、Ia・b型式間にみられる端面角の調整の違いは、瓦自体の形状に直接的な影響を与えるもので、しかもその発生した要因としては、瓦の形状を工人がどのように認知し、それをどの程度再現しようとしていたのかといった違いに起因すると考えられる。このような、工人の行使する身体技法とそれに関わる認知程度の違いは、ある程度熟練した技法を要する瓦製作において、単なる一工人同士の違いに収束せず、異なる工人系統(熟練工人-非熟練工人の関係であったとしても)の存在が想定できるだろう。以上の内容から、平瓦Ia型式とIb型式という型式差は、工人差と捉えることができ、篠岡2号窯の瓦生産においては、異なる系統の工人が動員されたと想定できる。しかし、これには一つの課題が残されている。それは、時期差

の判別である。篠岡 2 号窯は、先述の通り、窯体が確認されておらず、遺物は基本的に灰原からの出土であることから、瓦はおろか、須恵器などとの関係性が不明確な点も多く存在する。そのため、篠岡 2 号窯出土遺物のみの検討では、その操業実態を復元するにあたっての限界がある。確かに、平瓦 I a 型式と I b 型式では、胎土や焼成といった属性に違いは見出せないところから、同時期の生産である可能性が強く推定されるものの、決定的な根拠とはならない。したがって、以下では、篠岡 2 号窯の供給先である東畑廃寺において、篠岡 2 号窯産の瓦がどのような位置付けとなるのかを検討する。

4. 篠岡 2 号窯製品の供給と供給先での位置付け

篠岡 2 号窯の製品が、中島郡に位置する東畑廃寺へ供給されていたことは先の通りで、しかも、軒丸瓦の年代等から、東畑廃寺の創建期に供給されていたと考えられている (e. g., 梶山 2001、梶原 2010、斉藤 1990)。そのような中、篠岡 2 号窯産の瓦が東畑廃寺へどの程度供給されていたのか、いわば東畑廃寺において篠岡 2 号窯製品の占める割合が如何様であったのかは不明な点も多い。ここでは、篠岡 2 号窯の製品が、東畑廃寺においてどのような位置付けとなるのか、①東畑廃寺第 5 次調査区瓦溜まり、及び 4-A 区 S K 14 埋土における平瓦・丸瓦を対象に、篠岡 2 号窯産の瓦がどの程度含まれているのか示した後に、②軒丸瓦についても東畑廃寺全体で検証し、篠岡 2 号窯産の瓦が、東畑廃寺でどのような位置付けとなるのか、検討を行なう。

4. 1. 東畑廃寺の平瓦・丸瓦における出土比率

東畑廃寺は、稲沢市教育委員会により 7 次にあたって調査が行われており、伽藍配置は法起寺式のものが想定されている (北條 1996)。出土軒瓦としては、軒丸瓦が 18 型式、軒平瓦が 15 型式⁽³⁾と多岐にわたり、さらには、川原寺や橘寺と同文の方形三尊埴仏や火頭形三尊埴仏の出土も確認されている (北條 1996)。そのような中、第 5 次調査報告書では、第 5 次調査区瓦溜まり、及び 4-A 区 S K 14 埋土の平瓦約 680 点、丸瓦約 350 点を対象に、型式別で出土比率が提示されており、東畑廃寺における全体的な平瓦・丸瓦の比率も大幅な差異を持たないことが指摘されている (北條 1993・1996)。ここでは、その内に篠岡 2 号窯産の瓦がどれほどの点数・比率を占めているのかを見ていく。まず、篠岡 2 号窯産の瓦を抽出するにあたって重視した属性は、凸面調整 (丁寧なナデ調整 or 強い横ナデ調整)、胎土 (小石をほとんど含まないかなり精緻かつ密なシルト) とした。特に胎土については、東畑廃寺内の出土瓦は小石をいくらか含む、もしくは粗い胎土をもつ個体が多く (いわゆる細粒砂や極細粒砂)、凸面調整に大きな差異が無くとも (ナデ調整)、胎土によって篠岡 2 号窯産の瓦を認定することはある程度容易である。以上の条件の下、改めて第 5 次調査区瓦溜まり、及び 4-A 区 S K 14 埋土の平瓦・丸瓦の出土点数を確認した上で、篠岡 2 号窯産平瓦・丸瓦の点数と全体に占める比率を示すと、図 10・表 2 のようになる。ここから読み取れる通り、篠岡 2 号窯産の瓦はかなり客体的であることが分かる。だが、東畑廃寺は、一枚作りの平瓦が確認されていることから分かるように、補修による葺き替えや差し替えの瓦も多数存在する。こ

のようなことから、篠岡2号窯産の瓦についても、後の補修により、創建時点でみられた主体・客体を反映していない可能性が大いに考えられる。そこで、次に見る軒丸瓦の出土比率から、補修による影響も含め、東畑廃寺における篠岡2号窯産瓦の位置付けについて見ていく。

4.2. 東畑廃寺出土の軒丸瓦における出土比率

東畑廃寺では、軒丸瓦が18型式確認されているが、それらの中で、篠岡2号窯産の軒丸瓦が占める個体数とその割合を示すと図11・表3のようになる。ここから分かるように、東畑廃寺全体の軒丸瓦においては、篠岡2号窯産の軒丸瓦は少数で、平瓦や丸瓦と同様に客体的であると言える。また、東畑廃寺の創建期に目を向けると、軒丸瓦は複数型式見られたことが示されているが(北條1996・1998)、この見解をひとまず是とすると⁽⁴⁾、創建期における出土軒丸瓦全体でも、主体を占めないことが分かる。したがって、東畑廃寺の中で篠岡2号窯産の瓦は総じて客体的で、篠岡2号窯は主の供給元ではなかったことが言える。

5. 篠岡2号窯の瓦生産に対する一考察

以上、篠岡2号窯の瓦生産に従事した工人単位の検討を行うとともに(第3章)、篠岡2号窯の供給先である東畑廃寺において、篠岡2号窯産の瓦がどのような位置付けとなるのか、数量比等を用いて検討してきた(第4章)。ここでは、これまでの検討から得られた内容を元に、篠岡2号窯の瓦生産について考察を行なう。改めて、これまでの検討をまとめると、篠岡2号窯の瓦生産に従事した工人は、少なくとも2系統の工人単位が復元され(第3章)、供給先である東畑廃寺においては、篠岡2号窯産の瓦が客体的であることから、篠岡2号窯は東畑廃寺の主となる供給元ではないことが明らかとなった(第4章)。これらを加味すると、従来指摘されていた篠岡2号窯の開窯の契機として、古代寺院(東畑廃寺)の造営と密接な関わりを持っていたことについては、瓦生産の観点から見ると再考の必要があるのではないだろうか。そもそも、開窯の契機を寺院造営に求めた場合、その背景には、寺院造営主体と窯の経済的な管理主体が同一もしくは密接な関わりをもつことが前提となるが、仮に、寺院造営が開窯の契機であった場合、瓦生産を根拠とするならば、東畑廃寺における篠岡2号窯産の瓦は主体的であったと想定される。しかしながら、東畑廃寺においては、篠岡2号窯産の瓦が客体的であったため、実態としては、篠岡2号窯における瓦生産はあくまでも副次的なもので、単に爆発的に増加した瓦需要を満たすための一時的な瓦生産であったと考えられる。これは、梶原氏の指摘する、8世紀前葉までの地方における瓦陶兼業窯の操業形態と整合する(梶原2010)。そのような中、篠岡2号窯の瓦生産に従事した工人は、少なくとも2系統の工人単位が復元された。篠岡2号窯は尾北窯(篠岡地区)の開窯に関わる窯であることから(城ヶ谷1993)、瓦製作技術がいわゆる新技術として見なせること(城ヶ谷1993・1996・2007)、さらには、畿内からの工人移動が想定されることから(梶山2001・2005)、2系統の工人単位は瓦製作技術の伝授者と受容者が反映されたものと見なすこともできる。しかし、先の梶原氏の指摘にもあるように、尾北窯全体の瓦生産では瓦当文様や瓦製作技術が

定着しないことから(梶原 2010)、技術移植としての瓦生産は想定できず、仮に技術交流があったとしても、当初からそれを目的として工人を動員したとは考えられないだろう。むしろ、一時的な生産であっても、その短期間で瓦需要を満たすべく異なる工人がそれぞれ動員されたものと見なせよう。

おわりに

以上、雑多ではあるが、篠岡2号窯出土瓦の再整理と再検討を行い、工人単位の抽出と供給先への検討から、操業実態について考察を行なった。すると、篠岡2号窯の瓦生産については、一時的かつ副次的であるものの、一時的な生産であっても、その短期間で瓦需要を満たすべく、異なる工人がそれぞれ動員されたことが考えられた。8世紀前葉までの地方における瓦陶兼業窯は、場当たりの操業形態が復元されているが(梶原 2010)、篠岡2号窯も同様の操業形態が想定されよう。だが、今後はその「場当たりの瓦生産」の実態について、地方の立場から一層追求しなければならず、そして、地方における手工業生産全体の中で、瓦生産がどのような位置づけとなるのか、今一度再考しなければならないと筆者は感じている。そのような中、地方の瓦は、資料状況に恵まれず、広く比較検討できない場合が往々にしてある。本稿では、従来瓦に残る製作痕から技法を読み取る方法のみならず、瓦に対する工人の認知程度に言及しつつ、検討を進めてきた。これについては、消化不良感が否めないものの、このような工人の瓦に対する認知程度を推し量る検討は、残存状況の悪い瓦に対峙する際の一視点として注目されるものと筆者は考えている。これら議論については今後の課題とした上で、ここではひとまず擱筆する。

謝辞

本検討に際しては、名古屋大学大学院人文学研究科の梶原義実先生、中川朋美先生より懇切丁寧な御指導を賜った。また以下の諸氏・諸機関より多大なるご助力を賜わるとともに、資料の実見に際し多くの便宜を頂戴した。末筆ながら心より感謝申し上げる。

愛知県陶磁美術館、一宮市博物館、稲沢市教育委員会、奈良文化財研究所
岩永玲、大西遼、金田朋大、瀧はる香、田中俊輔、道上祥武(五十音順、敬称略)

註

- (1): 本稿でⅡ型式とした平瓦については、出土個体が3点であることから、工人単位抽出の検討に耐えうるものではなく、ここでは除外することとした。しかしながら、本文中でも示した通り、平瓦Ⅰ・Ⅱ型式間における凸面調整の違いは、同一単位の工人によって製作されたとは認め難い様相を呈している。
- (2): ここで言う、揺れとは、最小工人単位として認定するにたる根拠とはならなくとも、抽出した属性である製作上の痕跡が異なるもののことを言う。
- (3): 東畑廃寺における軒丸瓦の分類では、型式もしくは類の表記が用いられているが(北條 1996・1998)、本稿では、一範＝一型式と捉え表記を統一した。

(4) : 北條氏は、東畑廃寺出土瓦に対する編年案の中で、創建期(第一段階)においては軒丸瓦が6型式見られることを想定した(北條 1996・1998)。この見解については、梶山氏によって示された美濃・厚見寺跡や長福寺廃寺との関係性を加味し(梶山 1996・1997)、再検証する必要があるが、瓦当文様と出土点数から見ると、少なくとも、篠岡2号窯産の軒丸瓦が創建期において単一で用いられた軒丸瓦であるとは考え難く、主体的であったとは言えない。

参考文献

- 栗田 薫 2005 「新堂廃寺・オガンジ池瓦窯出土瓦の研究」『新堂廃寺・オガンジ池瓦窯出土瓦の研究』 山中一郎編 京都大学総合博物館資料基礎調査係
- 岩野見司 1977 「第5章 考古学から見た古代」『新編一宮市史』 本文編上 一宮市 131-150 頁
- 大参義一・山田友治 1967 「8. 篠岡2・44号窯」『東名高速道路関係埋蔵文化財調査報告昭和40・41年度(第1・2・3次)』 愛知県教育委員会 84-94 頁
- 梶山 勝 1994 「徳川美術館所蔵の古瓦—愛知県史蹟名勝天然記念物調査会旧蔵資料の報告—」『金鯪叢書』 第21巻 215-241 頁
- 梶山 勝 1996 「美濃尾張の軒瓦について—古瓦の出土地をめぐる拓本資料の功罪—」『岐阜史学』 第91巻 岐阜史学会 44-51 頁
- 梶山 勝 2001 「尾張の坂田寺式軒丸瓦をめぐる二・三の問題」『名古屋市博物館研究紀要』 第24巻 名古屋市博物館 1-12 頁
- 梶山 勝 2005 「尾張の坂田寺式軒丸瓦」『古代瓦研究Ⅱ—山田寺式軒瓦の成立と展開—』 古代瓦研究会編 奈良文化財研究所 300-307 頁
- 梶原義実 2010 『国分寺瓦の研究』 名古屋大学出版会
- 斉藤孝正 1990 「尾張における飛鳥時代須恵器生産の一樣相—篠岡2号窯出土資料を中心として」『名古屋大学文学部研究論集』 史学36 名古屋大学文学部 149-185 頁
- 城ヶ谷和広 1993 「尾張猿投窯と尾北窯」『愛知県埋蔵文化財センター年報』 4 愛知県埋蔵文化財センター 97-110 頁
- 城ヶ谷和弘 1996 「律令体制の形成と須恵器生産—7世紀における瓦陶兼業窯の展開—」『日本考古学』 3巻3号 83-100 頁
- 城ヶ谷和広 2007 「愛知県下における須恵器生産と流通」『研究紀要』 8 愛知県埋蔵文化財センター 49-59 頁
- 谷川 遼 2023 「上神主・茂原官衙遺跡出土瓦の検討—造瓦工人単位の抽出と人名文字瓦の分析—」『史観』 188 早稲田大学史学会 106-134 頁
- 谷川 遼 2025 「造瓦器具からみる造瓦工人集団・工人単位」『瓦研究の革新は東国古代史理解に何をもちたらすのか』 古代寺院 3D-GIS 科学研究会シンポジウム予稿集2 日本学術振興会科学研究費基盤研究(B)24K00142 「考古学ビッグデータの統合と3D-GISによる古代寺院

- 立地・造営・景観論」(研究代表者：野口 淳) 8-13 頁
- 中嶋 隆 1994「第5章 考察」『篠岡 112 号窯発掘調査報告書』小牧市教育委員会 49-60 頁
- 奈良国立文化財研究所 1987「2. 奥山久米寺の調査(1987-1次)」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報 18』65-71 頁
- 北條献示 1993『東畑廃寺跡発掘調査報告書V』稲沢市文化財調査報告 40 稲沢市教育委員会
- 北條献示 1996「東畑廃寺Ⅷ」『稲沢市文化財調査報告 44 :稲沢市内遺跡発掘調査報告書(Ⅱ)』稲沢市教育委員会
- 北條献示 1998「東畑廃寺と尾張国府・国分二寺」『檜崎彰一先生古希記念論文集』檜崎彰一先生古希記念論文集刊行会編 真陽社 121-132 頁
- 花谷 浩 1997「山田寺創建軒平瓦の製作技法-桶は一つ軒平瓦は皆兄弟-」『奈良国立文化財研究所年報』1996 奈良国立文化財研究所 24-25 頁
- 花谷 浩 2002「瓦の編年と使用堂塔の比定」『山田寺発掘調査報告』奈良文化財研究所 487-539 頁

図版

図 1～11、表 1～3 : 筆者作成

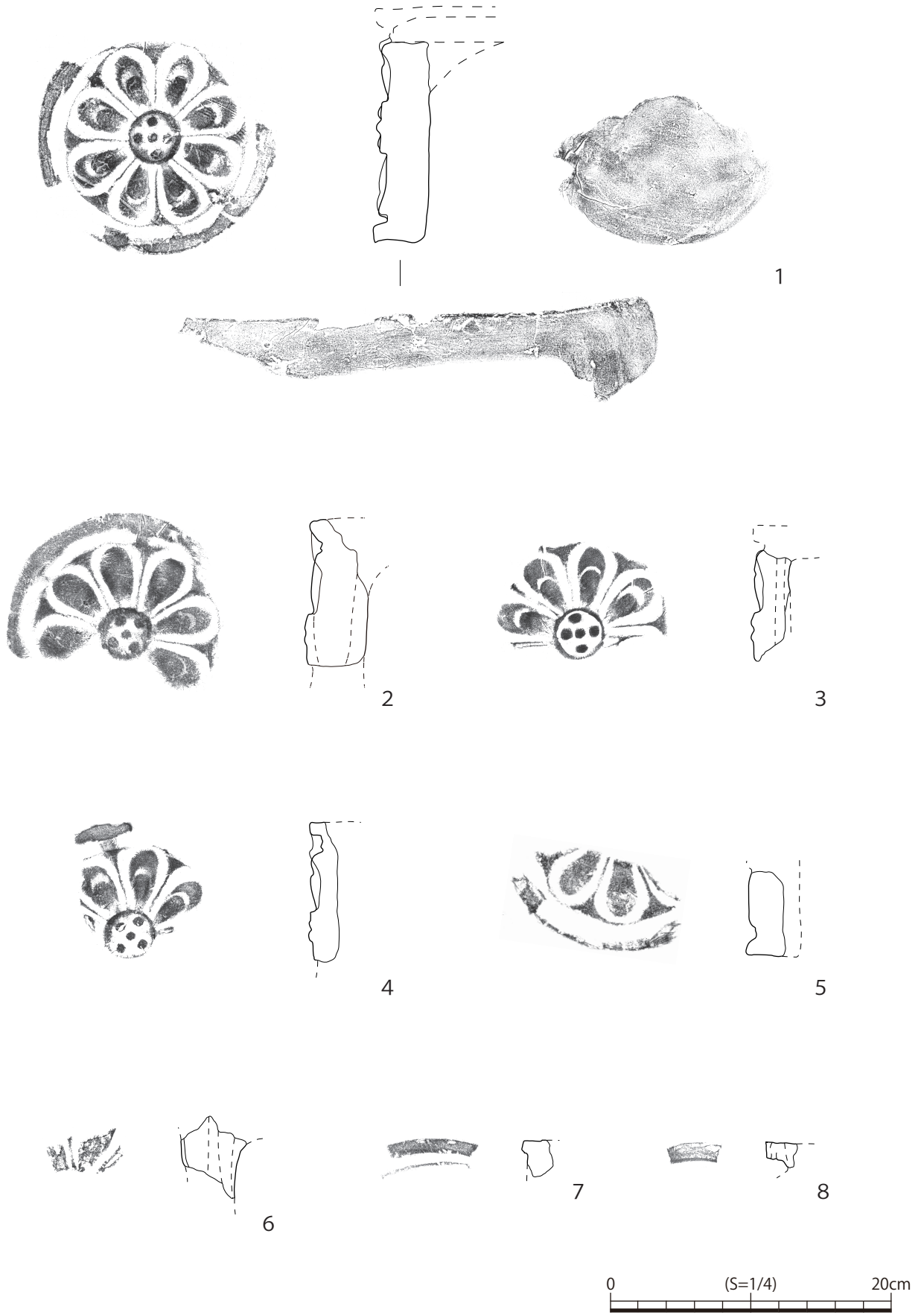


图1：篠岡2号窯 軒丸瓦 (S=1/4)

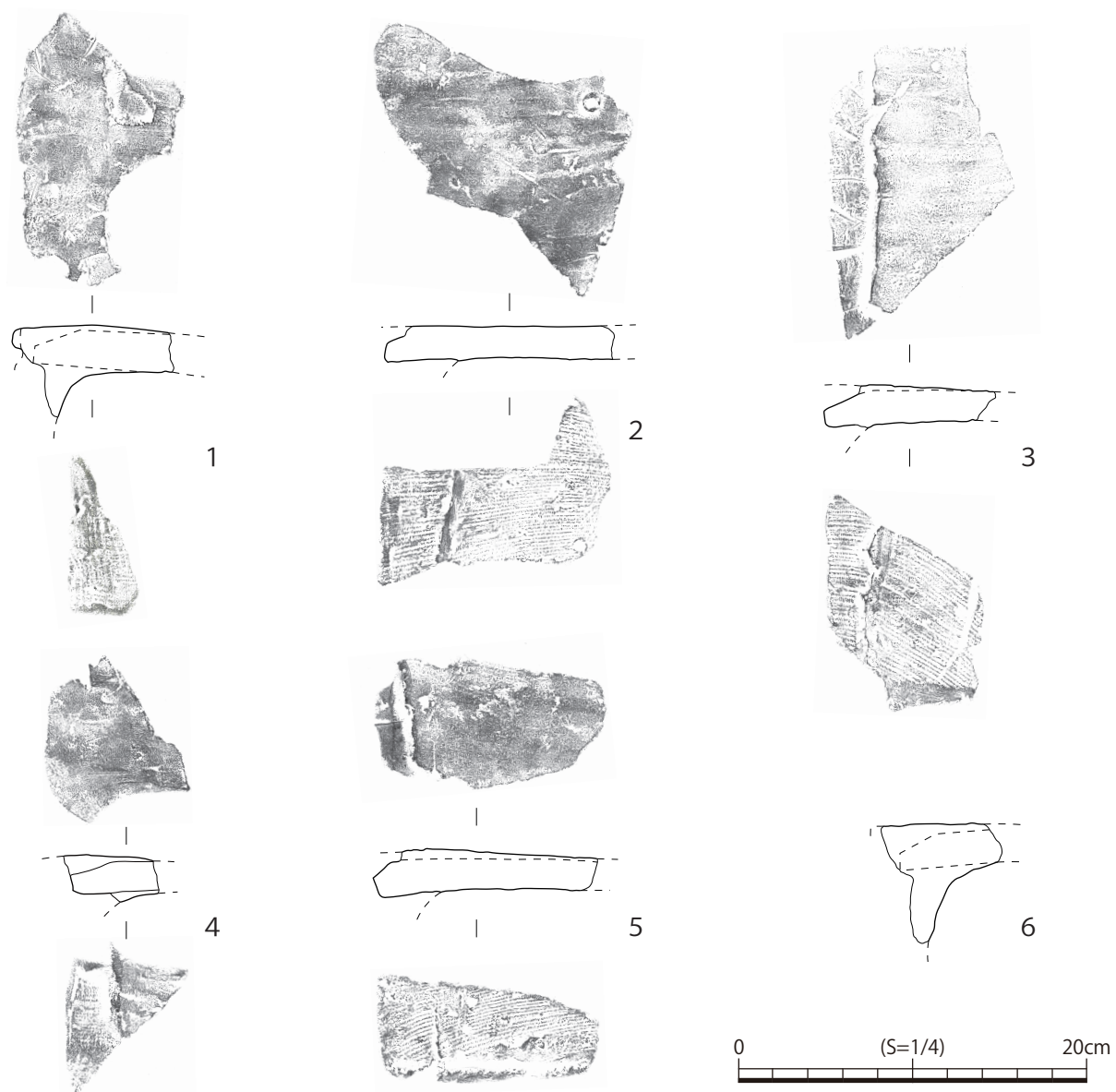


图2：篠岡2号窯 接合丸瓦 (S=1/4)

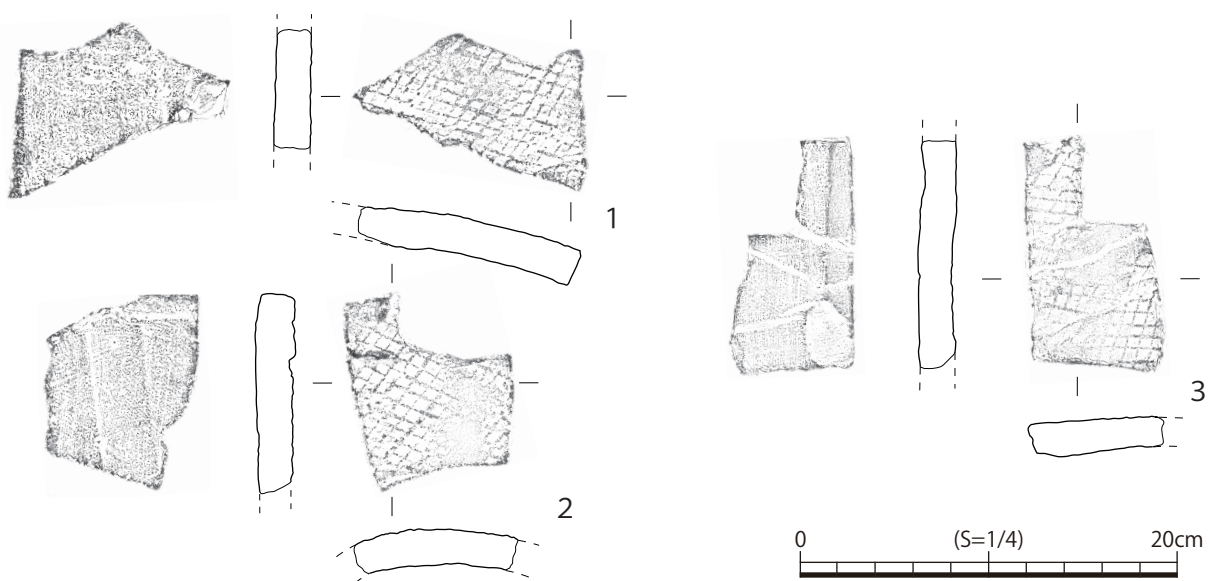


图3：篠岡2号窯 平瓦II型式 (S=1/4)

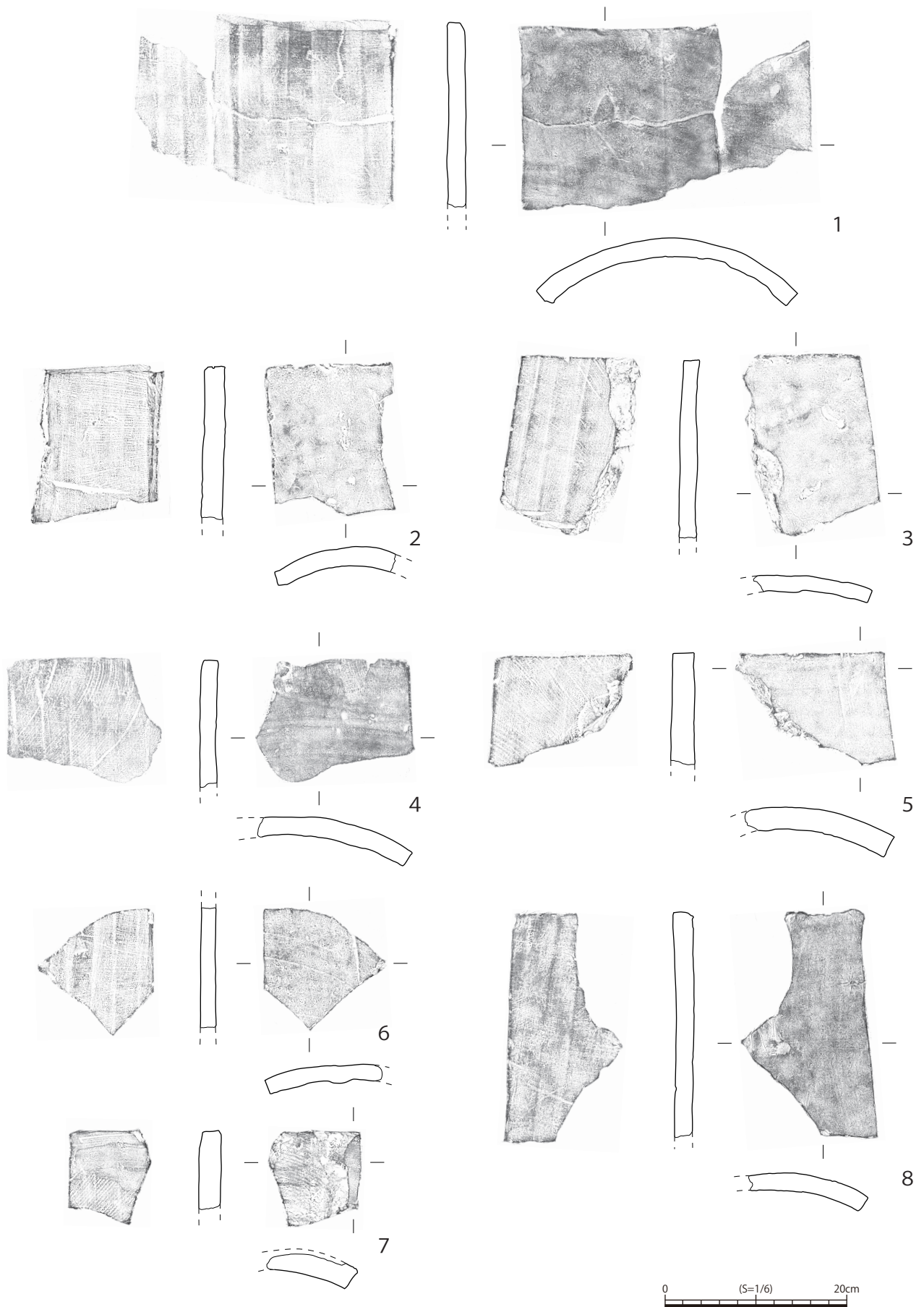


图4：篠岡2号窯 平瓦 I a 型式 (S=1/6)

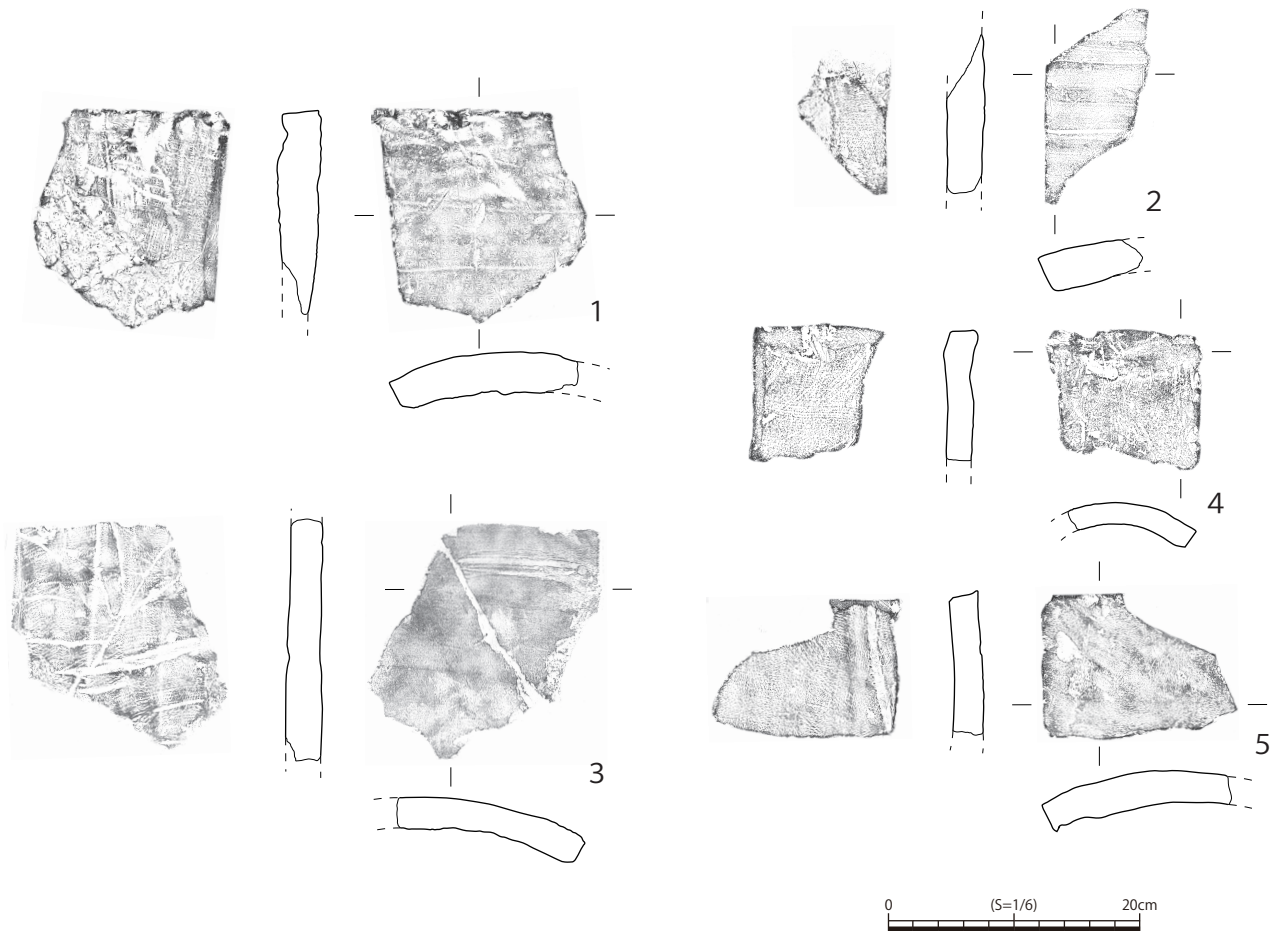


図5：篠岡2号窯 平瓦 I b 型式 (S=1/6)

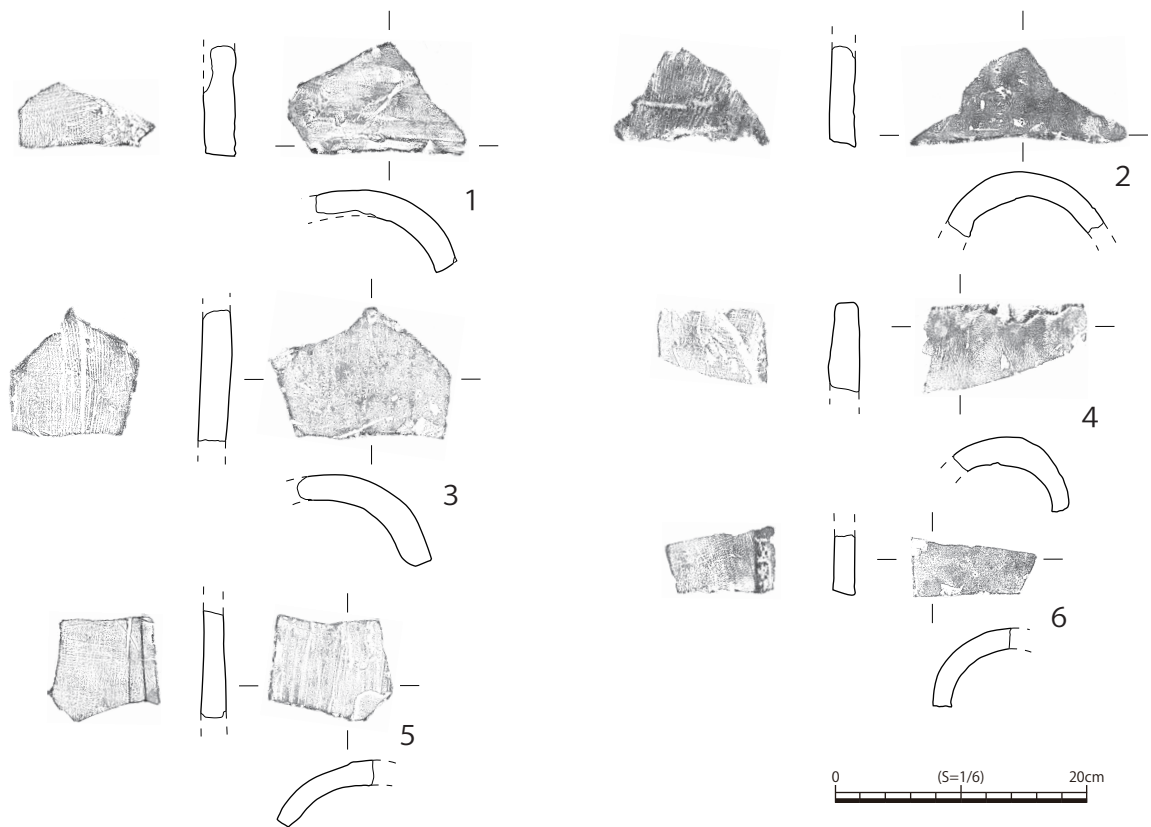


図6：篠岡2号窯 丸瓦 I 型式①(S=1/6)

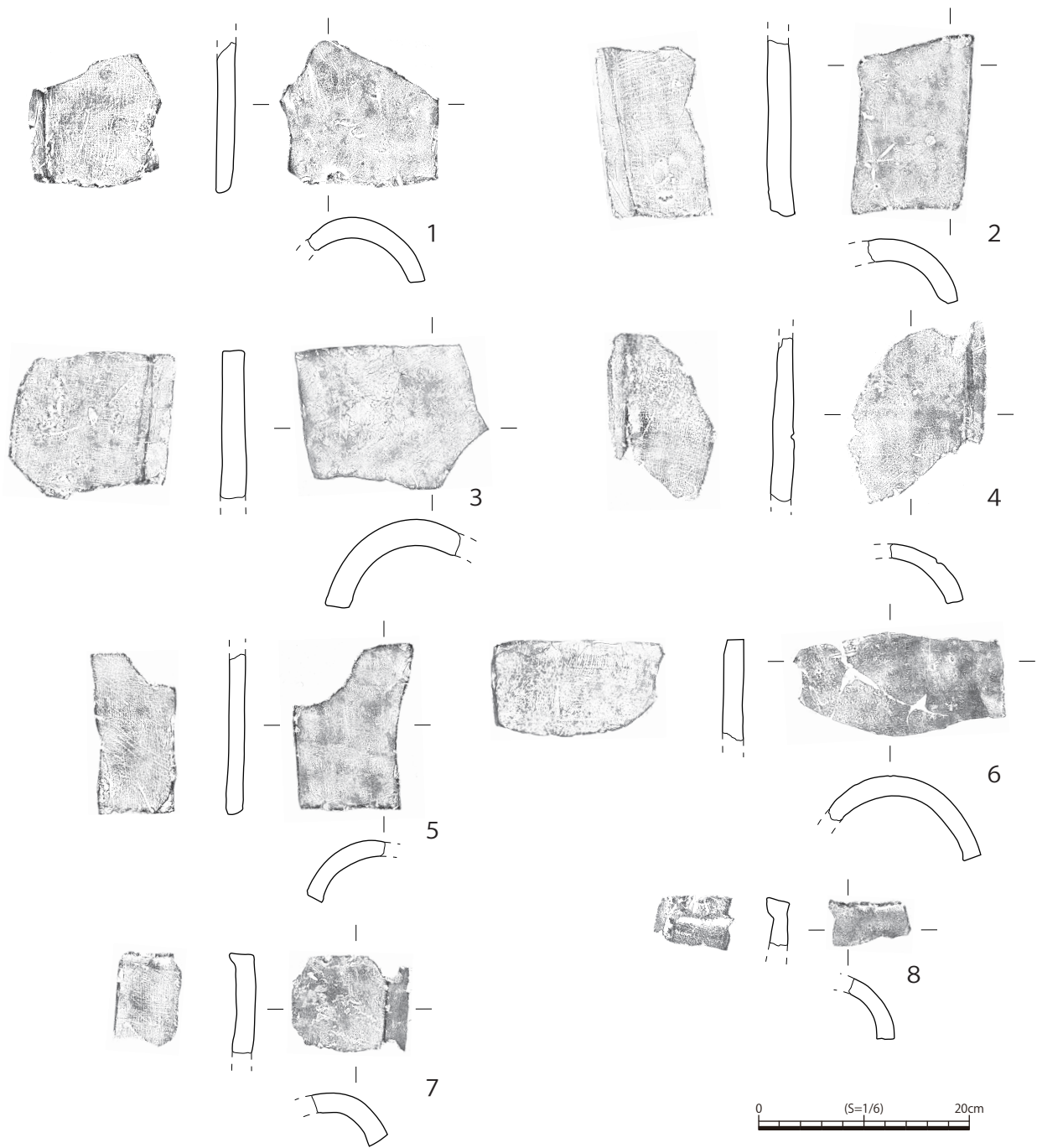


図7：篠岡2号窯 丸瓦Ⅰ型式②(S=1/6)

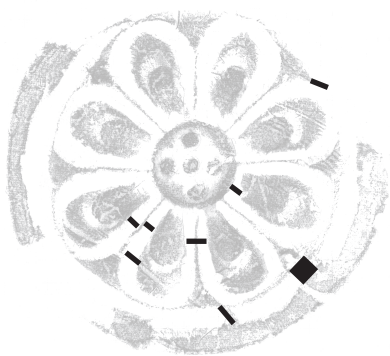


図8：篠岡2号窯 範傷位置模式図

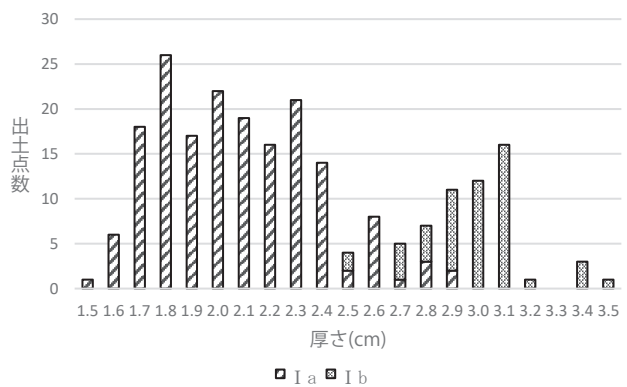


図9：篠岡2号窯 Ia・b型式 出土比率

型式	凸面		凹面			側面		端面		厚さ		胎土	焼成	
	丁寧なナデ	強いナデ	布目(密度10×10本/cm前後)	糸切り痕	桶枠板痕	側面平行ケズリ	破面(凸面側)	端面平行ケズリ	端面角調整	1.5～2.9cm	2.5～3.5cm	緻密なシルト	良好	不良
la	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
lb	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

表1：篠岡2号窯 平瓦la・b型式 属性表

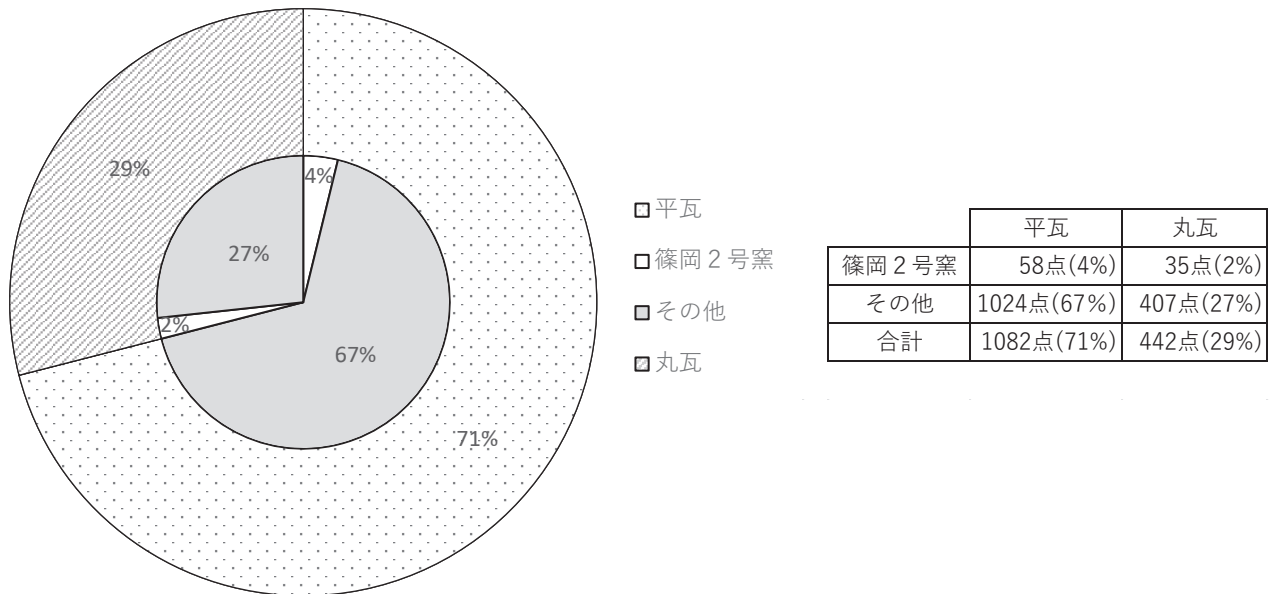


図10・表2：東畑廃寺出土 篠岡2号窯産平瓦・丸瓦出土比率

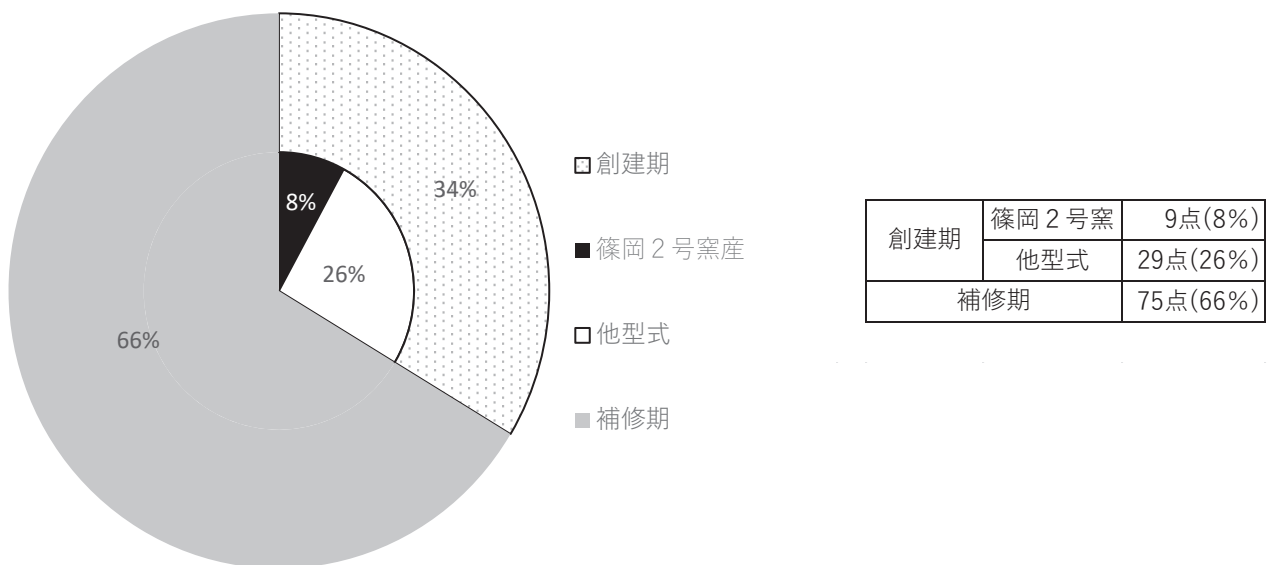


図11・表3：東畑廃寺出土 篠岡2号窯産軒丸瓦出土比率